2005 年 6 月 16 日　　第 27 回研究会

発表者：林 成美（東京外国語大学博士後期課程１年）
発表題目：
台湾の「古契字（文書史料）」に見られる開拓及び土地売買に関する契約関係

本研究会では、修士論文で取り上げた台湾の文書史料、特に、土地契約文書を中心とした「古契字」を用い、清代台湾における開拓及び土地売買に関する契約関係について報告した。

第一に、台湾における文書史料に関する用語の区別と中国大陸における用法との違いについて説明した。台湾における「古契字」とは、一般的に民間文書のことを指しており、売買契約の証拠となる売契、家産の配分を定めた鬮書、及び契約文書等が含まれる。ただし、この用語は中国大陸ではほとんど用いられておらず、用法にも差異が見られるため注意を要する。

第二に、台湾に現存する「古契字」の収集・整理・公開の概況について説明した。台湾では、近年、特に 1990 年代以降、公蔵ないし私蔵の文書史料、特に民間文書である「古契字」の収集や公開、文書史料集の刊行が盛んに行われている。このような「古契字」の収集の成果によって、台湾史研究は既に「顕学（注目される学問）」とみなされている。

第三に、『台中縣立文化中心蔵臺灣古文書専輯』（洪麗完選稿，1996 年，台中縣立文化中心）に収録された岸裡社パゼッペ族（Pazeh，拍宰族・巴宰海族）に関する「古契字」、具体的には岸裡社と漢人移民との土地開拓契約文書、及び漢人移民間における土地売買契約文書を用い、嘉慶年間、特に 1800 年代を境とする土地権利関係の変容について説明した。

以上の発表に対して、参加者から、かつての日本の台湾総督府及び臨時台湾旧慣調査会による調査と史料の収集や、現在の台湾における台湾史研究の状況に関する質問等が出されると同時に、モンゴルやトルコ等の他地域における文書史料を用いた研究に基づく貴重なアドバイスも出され、活発な質疑応答と議論の後終了した。発表者にとっても大いに実り多い研究会となった。